

主体性を重視した教員採用試験対策の取り組み ～コロナ禍での「繋がり」を求めて～

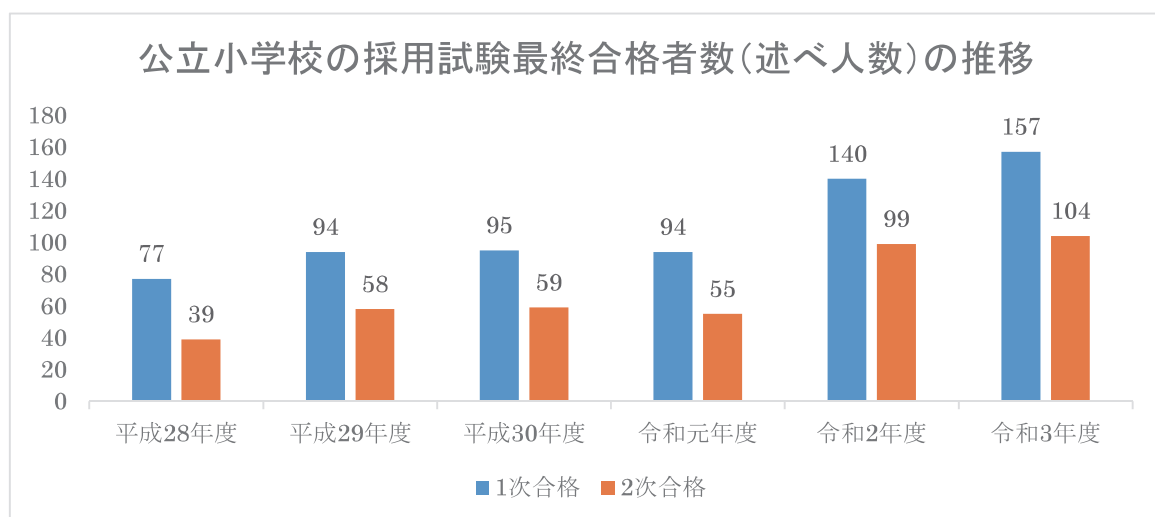
教職支援センター副センター長
特任教授 榎 元 十三男

教職支援センターの究極の目的は、学生の将来の夢の実現に寄与することである。加えて、教員としての職務を遂行していくうえで必要な資質や能力の基礎を培うことである。この理念の実現には、学生自身が理想とする明確な教師像を描き、それに立ち向かおうとする揺るぎない志をもつことが大前提である。さらに、その志を高めていく日常の教職課程の学修及び個々に応じたきめ細かな支援センターの実践的指導が不可欠であると考えている。

本学の学生は、入学時から「信頼される教育者を目指す」という確かな目的意識を持ち、その時々で真摯に努力する姿が見られる。その一方で、重要な局面を迎えると、慎重になり過ぎるあまり、自分自身で判断するよりも指導者や他人に追従する傾向もみられる。そこには、合格そのものの喜びは味わえても、合格後の教員像の具現化には繋がりにくいのではないかと懸念される。目まぐるしく変化し続ける社会状況や自然環境、そして教育現場の将来を見据えると、どんな状況においても自ら置かれた現状を直視し、乗り越えるための方策を考え、自分なりに新たな課題に挑戦して、貢献しようとする力強さや逞しさが欲しい。

本支援センターでは開設以来、実務家の教員と事務部門とが一体となり、担当部長のリーダーシップのもと、常に教育行政の最新情報を共有しながら学生支援に還元しつつ、大きな成果を更新してきた。今後もさらに改善を加え、取り組みの強化に努めねばならない。

そこで、コロナ禍で先行きが不透明な中、今年度は学生の主体性に繋がる取り組みを意識しつつ、教員主導からの転換を図るいくつかの実践を試みてきた。以下に、今年度の実績とともに、具体的な実践例を振り返り、今後の展望を考えてみたい。



1. 今年度の教員採用試験の実績（※数字は延べ人数）

- ・公立幼保合格者・・・・・・・・・・ 29名（昨年度24名） 大幅増加
- ・公立小学校合格者・・・・・・・・・・ 104名（昨年度96名） 過去最高
- ・公立中学校・高等学校合格者・・ 10名（昨年度 6名） 近年では健闘
- ・公立栄養教諭合格者・・・・・・・・ 1名（昨年度 0名） 画期的

2. 自己選択・自己判断を促し、主体性を重視した教採対策の取り組み

（1）見通しをもち安心して繋げる無理のない計画立案

主体的に取り組むためには、自分なりの持続可能な計画が必要となる。その際、学外の体験活動やアルバイト、部活、ボランティアなど生活スタイルが個々に違うため、他を見習うことができにくい。したがって、教採対策作成の指導に当たっては、「全体計画」「月計画」「週計画」「一日の計画」等の概要や先輩の取り組み例を示したうえで、時間をかけて個別に相談しながら自己決定を促してきた。教員になった際には、学校組織の一員であると同時に、学年や学級の主たる経営者でもあり、創造的・主体的な取り組みが求められる。何においても確かな計画性をもった取り組みこそが目標達成への近道となる。学生のうちから自己決定の場を重ね、達成状況をお互いに振り返り、認められることで自信や主体性に繋がったように感じている。

（2）受験地選択における最新情報の提供

どの自治体を選択するかは、学生にとっては大きなターニングポイントでもある。地元志向の学生が大半であるが、最終的には採用倍率や教育方針、求められる教師像、特色ある取り組み、働きやすさや住環境など様々な要因が作用する。本支援センターでは従来から各教育委員会と連携して自治体説明会に積極的に取り組んでいるが、今年度もさらに拡大して実施した。オンラインと対面の両方で開催し、多くの自治体からの情報提供を得ることができた。個別の具体的な疑問など、実施要項やパンフレットだけでは読み取れない情報も具体的に説明していただいた。とりわけ、教員経験者の話は教職の魅力ややりがい、使命感等にまで及び、学生の心を動かし複数受験に繋がるケースも見られた。また、ワークショップと自治体説明会をタイアップしたこともあり、受験地以外の説明会にも多くの学生が自ら参加することとなり、新たな情報を手に入れようとする動きも見られた。4回生のみならず3回生の参加も見られたことは、さらに明るい兆しと捉えている。

（3）学生の良さを引き出すオンライン個別相談窓口

今年度もコロナ禍が続き、とりわけ4回生の学生にとっての不安感、焦燥感は察するに余りあるものがあつた。教員採用試験の形態や内容も変わるのではないかと危惧する学生もいた。そこで、少しでも不安感を取り除くために、自らの意志さえあれば、いつでも、誰でも、どこからでもオンライン相談を受けることができる体制を整えた。学生からは、一次対策の進め方や自己アピール、受験地選択など気軽に活用できると好評で相談件数も予想を上回った。オン

ラインであれば、プラバシーが守られるので深刻な相談も多く、こちら側からのアクセスも容易で素早く対応できる利点がある。今後も主体性を促す一助として、コロナ禍の状況にかかわらずオンライン相談窓口開設に継続して取り組みたい。

(4) 学生同士を繋ぐワークショップ

本センターでは例年3回生の12月からワークショップに取り組んでいる。全体のスケジュールや試験内容、服装や身だしなみ、自己アピール等を確認し、実際の面接練習や模擬授業、場面指導等の実践練習を行ってきた。当初は教員主導で基礎基本を共通に徹底して指導するが、終盤においては指導から支援に立ち位置を変えていった。その一つとして、合格した4回生が3回生へ指導し、互いに学生同士が学び合う場をワークショップの中に設定した。このような取り組みは、本学の教育活動の中でも継承されてきており、半ば伝統となりつつある。そのため、教員が求めなくても後輩のために力になろうと自らの体験を継承する姿が見られる。また、詳細な受験報告書を提出するまでが教採と捉えている学生も多く、結果的に好循環を生んでいると感じる。当然、複数受験の学生からは受験地の数だけ情報が集まることになり、複数受験を勧めている理由がここにある。学生同士の関わり合いを見ていて、まさに、“教採は団体戦である”ということに気付かされることが多い。

(5) 確かなデータに基づいた自分なりの学びの工夫と弱点強化

一次試験は、ある程度戦略的な対策を打たなければ、ただ単に過去問題等を繰り返しているだけでは成果は出ない。一次試験が突破できなければ、二次試験の舞台に立つこともできない。このことは、本学にとっては大きな課題である。そのための対策が二つある。一つは、ライブラリーコモンズ内にある“学習支援センター”の活用である。ここでは、学生の苦手とする各教科の相談を受け付け、就職用SPIやレポートの書き方を含め教科の学び直しを基礎から支えている。まさに、学生の学ぶ力や意欲を応援する場所である。二つ目は、1回生時からシステム化された各種講座である。1回生では一般教養対策講座、2回生では入門講座と称し「社会科学」「人文科学」「自然科学」の3分野を過去問中心に学ぶ。3回生では、教職教養対策講座と称し「教育原理」「教育法規」「教育心理」「教育史」等の基本的事項を学ぶ。4回生では、基礎講座と位置づけ「最新教育時事」「教育答申」「人物対策」等を合理的に学ぶ。それぞれの節目では模擬試験を受験し、確かなデータに基づいた学びの工夫と弱点強化に努めている。このように、入学時からの組織的・系統的な学びが用意されているので、学生自身の意欲さえあれば流れに乗り、自信に繋げることができる。

(6) 学校現場での多様な体験活動（インターンシップ・スクールサポーター・観察実習等）

教採対策には、学校現場での体験活動が欠かせない。本学の学生はそのことを認識し多くの教員志望者が、自ら学校現場に出向いている。とりわけ、教育学科では木曜日に行きやすいように時間割が設定されており、単位取得にも繋がり従来からシステム化され、継続されている

ことの一つである。受け入れ側の学校からは、人手不足もあり歓迎され、学生にとっても学びの扉が広がる場となり、両者にとって好循環となっている。学校では、目的をもって学ぼうとする学生の姿が高く評価されており、その体験が教採の自己PRや面接対策にも直結しているといつてよい。大学での理論学修が現場・現物・現実と融合する場として機能していることが面接練習等でも如実に表れているので、今後も積極的に取り組むことを勧めたい。

(7) 日常生活の中に引き寄せた受験対策

どんなに環境を整えて実践しても、日常の暮らしと乖離があつては定着していかない。受験時のためだけの練習に陥らないように、学生生活と一体化して取り組んできた。建学の精神である「自立心に富み、対話力と創造性に優れ、人類社会の発展に貢献する女性を育てる」ことを原点としつつ、本支援センターでは「挨拶」「時間厳守」「整理整頓」を基本中の基本として、日常生活の中に引き寄せて取り組んできた。入退室の仕方、誰かと出会った時の笑顔を添えた会釈、物事を整理し順序立てて説明すること、これらは教師である前に社会人としての基礎基本である。ちなみに、本学の教育学科の授業時には、挨拶で始まり挨拶で終わることとしている。受験対策においても常に心掛けているが、これらの言動は教師を目指す学生にとって必要不可欠であることを自覚しつつ、誰が見ていてもいなくても当たり前に行けるまで自分自身を高めてほしいものである。

4. 今後の展望

冒頭で示した通り、近年の教採合格実績には目覚ましいものがある。様々な要因が考えられるが、ひとえに学生自身の努力の賜である。また、教職課程の科目指導の質の高さである。さらには、各ゼミや学習支援及び学科教員の適切な援助と意欲付けである。そして、事務職員の緻密な手続きを通じた繋がりや細やかな配慮である。これらが合わさった総合力でもあり、どれをとっても重要な要因である。

今後も現状に甘んじることなく、更新し続けていかなければならない。教職支援センターでは、前述の通り今年度は学生の主体性に重きを置いて取り組んできたが、その年度によって学生の状況は同じではない。学生の意識やカラーや持ち味が少しずつ違うため、対策の練り直しが毎年必要になってくる。そのため、学科教員との話し合いや教職支援センター運営委員会等での意見交換は欠かせない。いずれにしても、一人一人の個性を潰すことなく学生自らが高め合う集団の取り組みを継続したい。

“入学者減”は教採対策に直結する大きな課題である。入学者が減れば、教採受験者も合格者も減ることとなる。どうにかして食い止める必要があるが、一方で少人数であればよりきめ細かい個別支援ができるという良さもある。どのような状況であっても、「自立心に富み、対話力と創造性に優れ、人類社会の発展に貢献する」教員を育てるべく、努力していきたい。

最後の授業～そのあとで～

教職支援センター

特任教授 松崎隆幸

これまで教職カリキュラムに位置付けられた「教職論」「教育課程論」「教職実践演習」「教育実習指導」などの授業を担当してきた。また、教職支援センターが主催する独自の取組として、教員採用試験合格に向けての「ワークショップ」や「ガイダンス」、教職に就く学生ための「社会人トレーニング」などの授業も担当してきた。教職カリキュラムに位置付けられた授業については、1月はじめにそれぞれの最後の回を迎えたが、本学での最後の授業は本年度教員採用試験に合格した教師の卵たちに向けての「社会人トレーニング」の授業となった。初任者として戸惑わないように、スムーズに着任校に馴染めるようにとの思いから、私の担当である学校現場でのあいさつ・職場での人間関係づくり・学級担任としての心構え・保護者対応について、DVD動画などを活用しながら私自身の学校現場での経験を中心に伝えていった。

教職に就くみなさんへ

教員採用試験突破！ お見事！！

傷のあるリンゴは美味である

ミカンを揉むと甘くなる

人も傷つき、揉まれて、味が出る

人間味のある教師になってね！！



これは最後の授業で私が学生に一番伝えなかった内容である。「リンゴは傷がついている方が甘い」と、リンゴ農家の方に聞いたことがある。リンゴはひょうや霜などによって傷がつくと、その傷を修復しようと果皮に多くの栄養分を蓄える。そこには糖分も含まれるので一段と甘くなる。でも、見た目が良くないため市場に出荷されることは少なく、この事実を知る消費者も少ないようだ。また、ミカンは「揉むと甘くなる」と言い伝えられてきた。揉むことでできた傷を修復するため、酸っぱい成分であるクエン酸が消費される。その分、甘みが増したように感じられるそうだ。時には傷つき揉まれて、それを乗り越えようとしてこそ「味」が出るのは、人も同じ。悩むからこそ、成長できる。自分を見つめ、課題と真正面から向き合える。その挑戦によって悩みを突き抜け、一步成長したという実感を得ることこそ、まさに教職を自らの進む道と決めた人が味わえる「醍醐味」である。この趣旨を出席してくれた学生全員がしっかり受け止めてくれたと確信している。

この最後の授業のあとで、学生全員から思いも寄らないプレゼントをもらった。1年生から4年間授業や教員採用試験指導に関わった学生からは、お礼と労いと教師になる決意を「生の言葉」で、また多くの学生からは心温まるメッセージを「寄せ書き」の形でいただいた。涙もろい私としてはうらっときてしまっていたがそこは必死にこらえた。ここに学生本人の承諾を得てそのメッセージのほん

の一部分を紹介させていただきます。

松崎先生 教職の授業や教員採用試験の練習で大変お世話になりました。

教師を目指すうえで不安もありましたが、授業や面接練習、ワークショップを通じて松崎先生からの教育現場の生の声を聞いて、自分もそんな風になりたいと強く思いました。これから先どんなしんどいことがあっても松崎先生のように生徒としっかり向き合って、何かあればすぐに相談しに行きたいと思ってもらえるような先生を目指します！

松崎先生 不器用な私を最後まで応援してくださり本当にありがとうございました。

上手く話せない私を何度も励ましていただき先生の優しさに何度も救われました。教職支援センターで勉強していると、必ず「いらっしやい！」と声をかけていただき、とてもうれしかったです。「今日も一日頑張ろう」と思えました。なかなか合格をいただけなくて辛い日々でしたが今となってはいろんなことが経験出来て良かったと思っています。目上の方との話し方や働く上での常識など早くに合格していたら学べなかったことを学ぶことができました。私は子ども達に挑戦することの素晴らしさ、頑張り続けることで報われることがあると実感できるよう行動していきます。

これまで本学で教職を目指す学生の指導に従事できたことを大変うれしく思っている。また当初の契約期間5年を全うすることができてホッとしている。とともに今思えばあつという間の5年間でもあった。しかし本学にお世話になった最初は「半年、もたないな！」というのが正直な実感であった。今までに経験したことのない大学での授業実践を担うプレッシャーを味わった。一コマの授業をするための教材準備が研究日、休日を使っても間に合わない。それと並行して教員採用試験に向けての学生指導が入ってきた。長年、教育委員会の教員採用試験には深くかかわっていたが、学生の受験地は地元兵庫県が多いとはいえ、全国を対象とし、受験する校種も私の専門の高等学校以外が大半である。保育所・幼稚園、小学校、中学校、栄養教諭に関わる採用試験の指導である。本学の他の先生方のような専門性が自分には備わっているのか。学生たちをひきつける魅力があるのか。完全に押しつぶされそうになっていた。そのような中、多くの教職員の方々に助けていただき支えていただいた。究極のところ私にできることは何なのかというところに行き着いた。これまでの高等学校現場での教諭、教育委員会における教育行政、知事部局での青少年健全育成、校長などの学校管理職としての経験をとおして、教職の魅力・やりがいや教職の難しさ、とりわけ困難に立ち向かう勇気などを少しでも伝えることができれば良いのではないか。そう考え直し自らを鼓舞した。また、私としては自らの経験を伝える中から普遍性・法則性まではいかなくても、何か共通性のようなものを見出すことができればと願って指導を継続してきた。私が本学での最後を迎える本年度、教職を目指す学生たちの頑張りが見事だった。小学校教員合格者数が過去最高を記録し、中学校・高等学校・栄養教諭合格者数も近年にない結果をもたらした。このような時に教職を目指す学生の指導に携わることができた一人として、学生の皆さんの夢の実現に向けて少しでもお役に立てたとしたら自らの使命・役割をほんの少しではあるが果たせたかなと自負している。感謝！！

「授業時間の使い方」について

文学部 日本語日本文学科
教授 安原 順子

1. はじめに

オンラインの授業であっても対面の授業であっても、限られた時間の授業では、「授業時間の使い方」は重要である。それは、生徒や学習者にとって良い授業かそうでない授業かの判断ともなるからである。筆者は、日本語日本文学科に所属し、同時に外国人のための日本語を教える日本語教員の養成を担当している。日本語日本文学科では、毎年、国語科教員志望学生のために「教職研鑽会」実施している。その際も、「授業時間の使い方」は、「教案を書く」「教える」という国語科教員と日本語教員双方の授業の共通点と同様に、重要な課題である。本稿では「授業力」の1項目として、教師の「授業時間の使い方」について考える。

2. 授業時間の使い方について

国語科教員でも、日本語教員でも、授業時間の使い方には求められる教師像に共通する問題点がある。『Teach Japanese～日本語を教えよう～』（2003）から引用すると、一般的に授業の組み立ての注意点には、以下のようなものがある。

- (1) 1回の説明の時間は短く
ダラダラと説明しない。
- (2) いい加減に時間配分をしない
細かく、時間配分を設定する。
- (3) 何を削るかはあらかじめ考えておく
時間があまるかもしれないことを、想定して準備する。
- (4) 「わかりますか」と言わない
学習者の様子から、「分かっていない」ことを「分かる」必要がある。

3. 国語科教員と日本語教員の授業における共通した注意点

次に、「授業時間の使い方」について、国語科教員と日本語教員の授業における共通した注意点をあげる。

- (1) 教案に細かく時間配分を書く
「授業時間」をうまく使うためには、まず、教案にきちんとした時間配分を書き込み、慣れないうちはそれにしがった授業を行うことである。
- (2) 時間配分通りに進んでいるか確認しながら、授業をする
授業の途中で、教案の時間配分を確認しながら授業を進める。教案より、はやい、また

は遅い進行の場合、その都度進行状況を調整しながら授業をする。

(3) 時間があまった場合を想定し、あらかじめ増やす練習を準備する

経験の浅い教師の場合、模擬実習では、時間が足りないよりあまる場合が多い。緊張や焦りもあり、どうしても早口で進めがちだからである。したがって、授業準備の際には、授業時間があまった場合は、どの練習の回数を増やすか、新しく練習を追加するかを考えておかなければならない。もちろん、その次に、時間が足りなくなった場合の削除部分も準備が必要である。経験の浅い教師では、急に、その場で対処できないからである。

(4) 授業時間を守って話す

授業では、開始時刻、終了時刻を守り、授業時間内に授業を終わることが必須である。授業全体を考えながら、授業をすることが肝要である。

(5) 50分または90分の最初と最後

授業の最初に「導入(またはアイスブレイク)」を行い、授業の最後には「まとめ」や「質問の時間」を設定する。

(6) 上記(5)以外の授業内容

上記以外の内容も、授業の課題別に個々に教案に時間を配分を書く。

4. 授業時間の効果的な使い方の訓練

では、どのようにすれば上記の問題点を克服し、効果的な授業時間の使い方ができるのだろうか。

(1) 教案に時間配分を書き、時間を測って繰り返し練習する

練習の際、生徒や学習者が目の前にいることを想定し、時間の経過を考えながら練習する。練習することによって、自己の授業を振り返り、よりよい授業ができるように十分な準備をすることができる。

(2) 授業での臨機応変な対応

経験の浅い教師の場合、教案通りに進まない授業をどのように進めるかは難しい。授業時間があまる場合、足りなくなる場合、どちらにしてもその場での対応が重要である。

5. まとめ

本稿では、国語科教員と日本語教員の「授業時間の使い方」における問題点について考察した。授業内容の準備は十分にしているつもりでも、十分ではないことが多い。授業準備、練習、実践の積み重ねにより、問題点を克服できると考える。

参考文献

河野俊之 (2003) 『Teach Japanese～日本語を教えよう～ 第2版』 凡人社

英語多読活動、はじめの一步雑感

文学部 国際教養学科
教授 吉 岡 志津世

今年（2021年）6月、英語多読活動のささやかなスタートを切ることができました。学科の新共同利用室が用意されたのを機に、ER室（Enjoy-Reading Room）と銘を打ち、テーブル・書架の搬入、Graded Readers（Bookwormsシリーズ、絵本他）を中心に、当面、英語多読図書約800冊の配架で、どうにか学生たちがブラウジングしながら選書できる冊数とレイアウトを整え、週2日の開室・貸出の態勢でのスタートでした。

かねてより、学生たちに一定のまとまった英語本を、辞書を使う負担感なしに今もっている英語力で、読み切る体験と読み切ったという達成感・充実感を感じてもらえたらと思っていました。学生たちは英語に関しても多様な学習歴を持っています。教室授業では、というと、どうしても到達目標、授業計画に基づく授業展開と評価基準に沿った評価で単位認定となるため、限られた時間の中では、その多様なニーズに応えることに限界を感じざるを得ませんでした。また、英語修得に向けた様々な教授法が開発されて、現在では、欧米の内容重視型教授法（CBI：content-based instruction）、内容言語統合型学習（CLIL：content and language integrated learning）を中心に、高等教育機関でも実践事例が報告されていますが、専門科目教員との連携や扱うコンテンツに課題があるようです¹⁾。さらには英語による協働作業を伴うことから学生の情動面での課題も少なくないようです。いずれにしても一定の統制を伴うでしょう。

教室授業や協働作業による学びを大切にしながら、一方、評価の対象とならず自由に英語に触れる、自分のペースで英語が読める、語学学習は苦痛ではなく何よりも楽しいものだと感じることのできる機会を提供できないものかと考えていました。

今回の英語多読活動はそんな授業担当者のフラストレーションからひとつの取組みとして採用したものでした。多読（extensive reading）というと、たくさんの英語本あるいはより多くの語数の読破、が思い浮かびますが、もちろんそれも大切な実践ではありますが、学生たちにとって英語辞書からの解放は大きいと思います。またそれを手助けする、さまざまレベル別のGraded readersが開発されたことも多読活動を実効性あるものにしてくれます。それぞれの学生が今現在の英語力で英語文章を、それもまとまりのある内容のフィクション/ノンフィクションを読み通すことができるのです。仮にレベル1（たとえば、Bookwormsの場合、ヘッドワード：400語）の1冊1000語の本でも、「おもしろそうだ」「これなら読めるかな」と自分自身で選び、辞書を使わずにその本がサクサク読めた、としたら、その快感は何ものにも代えがたい体験ではないだろうか；その読後感が自信につながり、さらに読書の幅を広げる推進力になるのではないかと、と期待したわけです。

多読の効用についてはすでに多く研究成果が発表されていますが²⁾、多読の活用も学生次第

です。最近の多読本出版社のサイトは、TOEIC® L&R Test スコアや CEFR と多読本レベル別の相関関係や選書の仕方など親切な情報を掲載しています。たとえば、TOEIC® Part 7 の読解問題だと、理解度 90%で読書速度 150～200 wpm が目安ですが、TOEIC® Reading Section のスコア向上を目指す学生なら多読活動を速読力向上として活用できるでしょう。あるいは、よく知っている物語や映画なら、retold されていても、どんな英語表現になっているのかに興味を持って読むことができるかもしれません。これはプレゼンテーションやライティングといったアウトプットの工夫につながるでしょう。

ところで、ER 室活動開始にあたって、いくつかのハードルがありました。多読活動にさまざま期待したい一教員としては、スタートにあたって、まず、どうしたら学生たちが ER 室を訪れてくれるかが最初のハードルでした。多読は学生自身の自主・自律的な活動が原則です。多読活動が定着していない初期段階だと、学生の「自主性」に任せていると、はっきり言って学生は来室しません。矛盾しますが、やはり最初は何とか「水飲み場」まで行くインセンティブを用意することでした。当面、英語科目の評価項目 5%として多読を課題として入れることにしました。学期に総語数 10,000 語の Book Report の提出です。これで少なくとも英語科目の受講生は来室し多読本に触れることになります。

次のハードルは選書でした。本好きの学生であれば問題はないのですが、たくさんの本を前にどのレベル、どんな本を読んだらいいのか、戸惑う学生も少なくありません。“Reading for Pleasure” をモットーとする多読では、本との出会いが次の多読につながるからです。ここで重要な水先案内人として ER 室運営スタッフの登場です（学科非常勤講師（英語）の先生にお願いしました）。先生は多読活動の真意を理解・共感くださり、学生とコミュニケーションを取り学生の興味・関心を引き出して適切な選書案内をしてくださいます。

そして今ひとつのハードルは、多読／読書を単にインプットに留めないということです。読書は多くは自己完結するものですが、「おもしろかった」「へえ～、そうだったんだ」といった読後感是谁かに伝えたい、共有したいとの欲求を喚起します。多読／読書をアウトプットにつなげる工夫です。今回は、「わたしのおススメ本」シート（A5 判）（書名、レベル、語数、おススメ理由）に自由に書いてもらい、それを ER 室ホワイトボードに掲示することにしました。他の学生の選書の参考にもなるでしょう。

以上の準備をしてスタートしました。あいにく新型コロナ蔓延防止等重点措置が度々発令されて、ER 室稼働期間は実質 3 ヶ月ほどでしたが、来室者数延べ 210 名、貸出冊数 354 冊でした。初年度は予想通り、ほとんどが学科英語科目受講生でしたが、学科学生の約 50%が多読活動をしたことになりました。

最後にアンケートから学生の声をいくつかご紹介しておきましょう。

まず、多読活動について、「英語の本を読む機会がないのでおもしろかったです」「英語の本を読む機会がないので、いい機会になりました！ストーリーの濃いものも多くおもしろかったです」「簡単なものから語数の多いものまで幅広くあったので、自分の能力や意欲に合わせて本

を選ぶことができよかったです」「今回は課題のため利用したことが多かったが、課題以外でも利用していこうと感じました」「多読とても楽しかったです！」この最後の声は素直に心に響きました。

読書／選書案内については、「本選びに迷ったら、気軽に先生に相談できるのが良かったです」「初めて行ったときはどんな本があるのか、何を読めばわからなくてウロウロしていましたが、先生がおすすめの本やあらすじなどいろいろ教えてくれたので選びやすかったです」「絵本とかもいっぱいあっておもしろいし、先生と話すのが楽しい」「様々な本があり先生とお話するのが楽しかったです」「先生がいろんなことを知っていて、お話しするのも楽しいので雑談や相談でも利用できると思った。」こうなるとスタッフの先生の業務を超えた、教育力とお人柄によるところ、大と言えます。

要望としては、「(ER 室が) 空いている時間が少なかったので少し行きづらかったです」「週2回じゃなく、週3回くらい開けてほしいです。あと、開室時間も延ばしてほしいです」といった開室頻度・時間増の声は多かったです。また、多読本について「ディズニー系の本を置いてほしいです」「もう少し有名な映画とかの本を増やせばいいと思います」といった増書希望もありました。既知の話題本には親しみがあり、手に取ってみようと思うのかもしれませんが。

アンケートでは、読んだ本のジャンルもたずねましたが、童話・ファンタジーに次いで多かったのが小説・エッセイ(随筆)だったので、ちょっと意外でした。そういえば、多読を授業科目としているケースで、大量インプットの多読授業に文学作品のアクティビティを組み入れることで多読の停滞を防ぐ一定の効果があった実践事例が報告されています³⁾。たとえば、読み手がテキストとの対話を通じてテキストが語ろうとすることを探りながら行う読み(point-driven reading)が、一定効果があったとのこと。多読であっても文学作品ならではの読みのおもしろさでしょうか。

英語多読活動、はじめの一步を踏み出して想いに任せて振り返ってみました。引き続き多読活動の定着を図り、多読／読書活動を通じて学生たちの知的好奇心をくすぐり、アウトプット／インプットの相乗効果が期待できるよう工夫を凝らしていき、結果、英語力の向上につなげていければと思っています。

<注>

- 1) たとえば、日本 CLIL 教育学会の活動参照 (<https://www.j-clil.com/>)。
- 2) 日本多読学 (<http://www.jera-tadoku.jp/>)、英語多読教育研究会 (<https://www.tsurumi-u.ac.jp/research/20200201/#about>) など活発な研究活動、事例報告を行っている。
- 3) 深井素子「読書指導としての場の多読授業—“Reading for Pleasure”というマジック・ワードを再考する」『慶應義塾外国語教育研究』Vol. 8 (2011), 69-90.

小学校課程新科目「生活科教材研究」の実践と評価

文学部 教育学科

准教授 金岩 俊明

教育学科では、これまで小学校教科専門に係る教職課程の科目としては、おおむね教科に関する「概説」と教職に関する「教育法」の2科目が設定されてきた。

小学校教諭免許課程において再課程認定を受けた令和3年度3回生より、各教科における選択科目として「教材研究」が設定された。本科目は、旧課程における「特別演習」に換えて誕生したものである。これまでの「特別演習」において設置されていた教科は、「国語・算数・社会・理科・体育」であったが、「教材研究」では「国語・算数・社会・理科・生活・家庭・音楽・図画工作・体育・外国語（英語）」の10教科に拡張された。この変更の目的は、小学校教員を目指す学生に対して、より専門的な資質・能力を育成する見地から、教材を中心として教科の理論及び指導法の学びを深める機会の提供であり、本学科としてより専門性を有した小学校教員の養成にある。

このような趣旨を踏まえて、筆者が担当する「生活科教材研究」は本年度から3回生後期に設定された。到達目標は、「生活科における魅力ある教材作りについて、目標や内容と関係付け、児童が興味・関心を高める教材を開発し、それを活用した授業実践すること及び、教材を交流して多面的な視点をもつことができ、生活科の授業実践に向けて見通しをもつこと」とした。以下に、実施初年度における授業概要と考察を示す。

- ・選択科目として履修人数は20人と、必修科目の「概説」や「教育法」と比べて少数であったが、教育実習期間の欠席を除き、授業を欠席する学生はほとんどなかった。つまり、小学校教員を志向する意欲のある学生が多く履修していたと考えられる。
- ・Zoom授業でのスタートであり、シラバスで示した内容の順番を一部変更したことはあったが、生活科学習教材の重点項目について、先行研究や実践事例を踏まえながら、毎回、ワークショップ形式で具体的な活動を進めることができた。
- ・対面授業になってからは、須磨離宮公園での自然物の観察・採取や、須磨寺前商店街で商店を訪問して地域の特色を生かした事物を教材化するフィールドワークを進めた。その結果、地域の方々との直接のふれあいを通して、連携の仕方を学ぶことができた。
- ・栽培活動として、履修生一人一鉢の活動でヒヤシンスの水栽培を実施した。生活科では、授業時間だけでなく、こうした課外での活動も大切であるため、授業時間外の活動を取り入れた児童との関わり方や適切な教材管理についても学ぶことができた。

このように、生活科で重視されている具体的な活動や体験として、「学習対象に直接働きかける活動」を児童の側及び教師の側で実践することで、より生活科についての興味・関心を高めることになったと考えている。

また、授業アンケートの結果（抜粋）は、以下の通りであった。（15人回答）

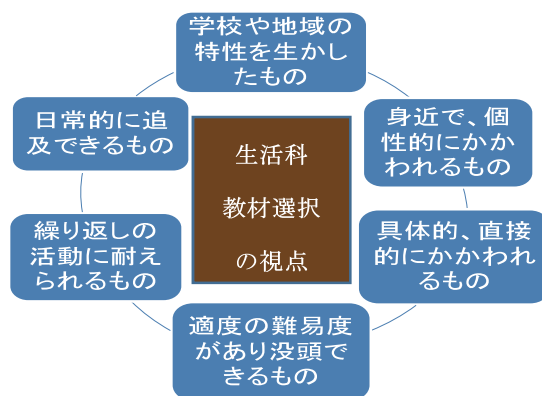
- ・「あなたは、この授業この授業を受けてどの程度満足していますか。」→「とても満足している」13人「やや満足している」2人、その他の項目は0人
- ・「担当教員は、授業内容の理解を促進したり、興味を引くための工夫を行っていましたか。」→「とてもそう思う」13人「ややそう思う」2人、その他の項目は0人
- ・「担当教員は、授業への積極的な参加や思考を促す工夫を行っていましたか。」→「とてもそう思う」13人「ややそう思う」2人、その他の項目は0人

さらに、自由記述には、児童の側の活動として実際に町探検に行ったりヒヤシンス等の植物を継続的に観察したりした実践的な活動や体験的に学習できたことや、楽しいだけではなく、教師側の準備なども勉強できたので、充実した授業であったとの感想が述べられていた。

ところで、教材は、普段使われる言葉であるが、その概念として、「教育の目的・目標を達成するための内容を、教育の対象者に理解させるために制作・選択された図書その他の素材。広義には教えるための道具としての教具を含む¹」をふまえないといけないと考える。

次年度からは、授業時間が長くなり教材の製作や模擬授業における活用が進めやすくなる。生活科としての特色をふまえ、以下の視点を大切に授業実践を進めていきたい。

- ・子どもが主体的に対象に働きかける対象や素材、場面として教材をとらえる。
- ・生活科の登場により、教材が多様化し、活動材や学習材、学習指導材的な意味合いが出た。
- ・生活科では、生活経験を教材として対象化するため、学習を発動させるため間接体験教材ではなく、直接体験教材を重視する。
- ・児童固有の「気付き」の質を高め、心の動きを促す自由度の高い活動材が必要である。
- ・体験と言語をつなぐ教材として、ワークシート等の活用が一層求められる。



<引用文献>

¹ 日本教材学会(2016)『教材学概論』図書文化,p.9

特別支援教育を根幹にした学級経営 —道徳科を要として—

文学部 教育学科
准教授 谷 山 優 子

1 特別支援教育を根幹にした道徳科を要とした学級経営

M校6年生1組(40名)の担任のN先生が、5年生の時から持ち上がりで受け持っていた子供たちは、低学年のころから荒れていた。それが、6年生になると、ますます不適切な行動が目立つようになっていった。教室に入らず校内を徘徊する、注意されて暴言を吐く、無気力でやる気がない、保健室にすぐに逃げるなど、発達障害だけが原因でない子供たちの不安定さに苦慮していた。

担任のN先生は、子供たちの中学校進学を見据え、道徳科の授業を要とした学級経営に取り組むことにした。子供が自分らしく生きていくための力を身につけさせて、中学校へ送り出したいという強い願いがあったからである。このN先生が大事にしたい道徳的価値は図表1のとおりであった。

図表1 学級経営の柱とした道徳的価値など(「6年1組学級通信」より筆者加筆修正)

「最高学年」として成長すること	……	「自覚」
「みんなで」完成させる気持ち	……	「協力」「 <u>信頼</u> 」「責任」「感謝」
自分だけでなく、自分も含めて仲間全員の こととして考える意識	……	「仲間意識」「 <u>相互理解</u> 」「寛容」
困難を乗り越えて人として成長すること	……	「達成感」「 <u>向上心</u> 」「 <u>よりよく生きる</u> 」

まずは、N先生自身が、誠実に愛情をもって子供に対応することを積み重ねた。「先生は信用できる、自分は愛されている」と子供たちに思わせるため、愛情ある言葉がけをシャワーのように浴びせ続けた。子供の失敗やトラブルに対しては、どうすればよかったのかを丁寧にかみ砕いて教え続けた。暴言に対しては、即座に「その言い方、先生は嫌な気持ちになります。」と聞き逃さない。が、それ以上責めない。言葉だけをあっさり叱る。子供の人格を尊重しながら、どうあるべきかをあきらめずに伝え続けた。N先生が発行した学級通信は、この1年間で322号になった。

そして、特に、道徳科の授業では、どんなにつたない発言でも、子供が言わんとすることを丁寧に補うよう心がけ、何が言いたいのか、どのような気持ちなのか、学級のすべての子供たちに伝わるように支援した。自分の気持ちを表現でき、認められ、共有できる道徳科の授業を、子供たちは心待ちにするようになっていった。6年生ともなると、家庭生活が不安定なことが

原因で荒れている子供は、世間の建前と本音について敏感になっていた。やらなければならないことはわかっている、それでもできない自分がいるという葛藤を、担任はしっかりと認めていった。こうして、きれいごとだけではない、やろうと思ってもなかなかできない自分や根っここのところでやさしさを持っているというのも含めた自分らしさが、学級みんなに認められる道徳科の授業が展開されるようになった。参観する筆者にも、子供たちは、道徳の授業が大好きだと語ってくれた。

2 子供を変えていく授業前と授業後の工夫

N先生は、どの授業でも「自分がよりよくなれる課題を見つけること」と「自分の気持ちや友達の気持ちを大事にする」ということができた時に、徹底して褒めていくという点を絶対ぶれさせずに授業をしていった。しかし、毎日起こるトラブルや問題行動に、とうとうN先生も疲れ果て、心が折れそうになることが何度もあった。これを校長、教頭、首席の教員らをはじめ、全校で励まし支えた。加えて、第三者である特別支援教育の専門家（筆者）が、学校訪問やメールで丁寧にN先生の授業づくりや学級づくりを評価し、フィードバックしていく体制を組んだ。必要な場合は、保護者はもちろん、教育委員会の指導主事や子ども家庭センター、社会福祉士、医療などとも連携した。

学力の遅れもあり、パニックですぐに教室を飛び出すX児や周囲の注目を集めようと授業妨害をしていたY児が、3学期になってもなかなか言動が改まることなく、N先生は困惑していた。しかし、観察していると、本心では、X児もY児も、言動を改め、自分を変えたいという気持ちがあることが痛いほどわかった。そこで、道徳科の授業を通じてクラスの仲間を信頼し、自分が出せるように変わってほしいという願いを込めて、図表2のような道徳科の授業を計画した。

担任は、X児を人の気持ちがわかりにくい困難さがあるとアセスメントし、「人と関わり合う中で、どういう時に相手がどのような気持ちになるかがわかる。」ことを目標にした「個別の指導計画」を立てて、支援し続けてきた。X児の認知特性に合わせて、「どういう言動のどこがよかったか」を常にフィードバックして褒め、X児自身が自分の個性や自分らしさを見出せるように支援した。同時に、周りの子供たちが、X児にどのような気持ちでどのように対応しているのかなど、X児の目に見えていないものを言葉で示し、周囲の子供たちの好意的な関わりに気づけるよう話し続けるようにした。

道徳科の授業では、思いつきで、ぱっと発した言葉も、N先生にしっかりと受け止めてもらえるという安心感を持っていたX児は、授業の始まりから最後まで能動的に参加できた。

この授業を通して、仲間と過ごせる小学校生活も残りわずかであることを身に染みて感じたのか、授業の最後の振り返りの「道徳ノート」に、「あかんことは『あかん。』と人に注意する。」と書いた。授業後は、周囲を気にせずやりたいことをやる言動が抑えられ、みんなの中で一緒にいることが楽しい、そのためには、やっではいけないことはやっではいけないのだという言

葉がX児から出るようになった。

図表2 「よりよく生きる力」を育む第6学年道徳科学習指導略案

第6学年 道徳科学習指導略案	
1 主題名 よりよい学校生活、集団生活の充実	
2 教材名 ひるがえる校章旗（出典：廣濟堂あかつき『小学生の道徳（第6学年）』より）	
3 ねらい いよいよ卒業式まで残り2か月となり、中学校進学に向けて有意義な毎日過ごすために今やっておくべきことを話し合いながら考え、よりよい学級、よりよい学校生活のために主体的に行動する態度を育てる	
学習活動（主な発問等）	◇指導上の配慮事項） ★個別支援 ●評価
1. 中学校に向けて、有意義な3か月にするためにどのように過ごせばよいか、本時の学習のめあてについて話し合う。	◇1月、2月、3月の6年生の行事予定プリントを配布し、行事について思い出を想起させる。 ◇楽しい雰囲気ですべての授業がスタートできるよう一人一人の様子をよく見る。 ★入学式や運動会などこれまでの行事で覚えているものは何か等を尋ね、めあてに関心を持たせる。
6年生の役割はなんだろう。すぐ実行できることはなんだろう。	
2. 資料「ひるがえる校章旗」の範読を聞き、信二が気づいたことについて話し合いながら、6年生としての役割について考えを深める。 ・学校を支える ・低学年にはできないことでも、6年生ならできることがたくさんある ・よいお手本をみせる ・学校をよりよくする	◇身近な日々の学習や生活（掃除）、委員会活動などから、6年生として何が実行できるか幅広く、深く考える視点を投げかける。 ★がんばっていることをほめ、そのことがクラスや学校にどう影響するか気づかせる。 ●友達のつぶやきにも反応しつつ、考えを深めようとしているか。
3. そのために大切なこと、自分がしなければならないことはなんだろう。 ・悪いことは悪いと誰であっても注意する。 ・責任を持って物事に取り組む。 ・下の学年にやさしくする。 ・自分からみんなが気持ちよく過ごせることをする。 ・困っていたら助ける。 ・周りをよく見て気を配る。	◇しなければいけないとわかっているけど、信二のようになかなかできないこともあるが、それを乗り越えたと最後に最後の小学校生活の充実があることに気づかせる。 ★なかなかできないことは誰にでもあるが、できることを続けることが大事だと意欲を喚起させる。 ●考えたことを実行していこうという意欲を持てたか。

同様に、Y児も、「人の役に立つことをさがしてがんばる。」と、この授業の「道徳ノート」の振り返りに書いた。授業後は、学級の子供たちの迷惑にならないようにと考え、問題行動を控える姿が見られるようになっていった。このような背景には、ほかの子供たちが、Y児の授

業妨害を迷惑だと受け止めないよう、担任のN先生が特別支援教育を根幹とした道徳科の授業を要とし、様々な機会をとらえて繰り返し指導や支援を続けたことがある。そして、彼らが、自分自身の言葉で「道徳ノート」に書き、それが毎日のように発行される学級通信に掲載されるということで、人に言われてやっているのではなく、主体的な行為であることを自覚したことが挙げられるだろう。

「どの子も一人一人違っている。互いに認め合って、みんなが自分らしく生きていけることが大切。」とN先生が特別支援教育の理念を基に、粘り強く発信し続けたことが、卒業してからも、どの子供もよりよく生きる力となっていた。

筆者は、この子供たちが中学校でちゃんとやっていると心配であったが、「部活動、がんばってるよ。」と次々に報告に来てくれるとN先生は嬉しそうに語った。

※本稿は、筆者の「特別支援教育を根幹とした通常の学級における道徳科の授業（新道徳教育全集第4巻 第29章）」の一部に加筆修正したものである。

<参考文献>

国立特別支援教育総合研究所ホームページ

<https://www.nise.go.jp/nc/>（2020年3月31日）

押谷由夫（2020） 「道徳教育5月号」 明治図書

国立特別支援教育総合研究所（2015） 特別支援教育の基礎・基本 ジアース教育新社

日本道徳教育学会全集編集委員会編著（2021） 中学校、高等学校、特別支援教育における新しい道徳教育（新道徳教育全集 第4巻） 学文社

谷山優子（2021） 特別支援教育を根幹とした通常の学級における道徳科の授業（新道徳教育全集 第4巻 第29章） 学文社

短期大学の教職課程を振り返って

総合生活学科

講師 古田 貴美子

総合生活学科では、中学校教諭二種免許状（家庭）を取得できる教職課程が設置されていたが、2021年度卒業生を最後に廃止された。私は、2011年から1年生の「教育実習指導」、2年生の「教育実習」「教職実践演習」を担当してきた。この11年間を振り返り、教職課程の教育の成果と短大生が教員になるための課題について報告する。

1. 卒業生の進路状況

11年間で、教員免許状を取得した者は37名である。総合生活学科の中では少数だが、社会人や他大学を中退した人が教員免許状を取得する目的で入学したことがあった。入学当初には教職課程を希望する学生はもっと多いが、一般の学生に比べて授業が多いこと、自らの学業成績や教員としての資質を顧みて、1年生のうちに数人の辞退者が出ることもある。

2年生は、全員が教員採用試験を受験し、1次試験の合格者9名、2次試験合格者2名と結果は良好であった。卒業後に教諭または臨時講師になった者が37名中9名である。18名が一般企業に就職した。大学に編入したのは8名であった。短大卒業では中学校教諭の免許しか取得できないが、大学家政学科に編入すると家庭科高校教諭免許を取得することができる。ほかに養護教諭、特別支援学校教諭の免許を取得するために他大学に編入した例もある。

短大卒業後すぐではないが、何年か勤務した後、また編入した大学を卒業した後に教諭または臨時講師となった者は2名である。2022年4月現在、全体の約30%が免許状を生かしたことになる、わかっているだけで6名が教諭となっている。（表1）

表1 教員免許を生かした卒業生

卒業年度	在学中→進路	異動
2011	社会人科目等履修生→大阪市1次合格→臨時講師	1年後 大阪市教諭
2012	大阪府教員採用試験合格→教諭	
2013	大阪府教員採用試験1次合格→臨時講師	
2014	社会人入学→就職	3年勤務→臨時講師→兵庫県教諭
2016	兵庫県教員採用試験合格→教諭	
2017	就職→臨時講師	
2017	他大学編入（養護教諭免許取得目的）	就職→臨時講師（家庭科）→（養護）
2020	大阪府教員採用試験1次合格→臨時講師	1年後 大阪府高槻市 教諭
2020	大阪府教員採用試験1次合格→臨時講師	1年後 大阪府守口市 教諭
2020	臨時講師	
2021	臨時講師	

2. 教員になるための自己課題

教育実習後には毎年、同級生や下級生の前で教育実習報告会を行ってきた。自分の実習状況と他の人の状況を比較することによって、より多くの気づきがあった。2020年度と2021年度の「教職実践演習」の履修生10名に、どんな先生になりたいかを尋ねた。自身が過去に経験した先生との関わりに加えて、教育実習での体験から考えた、教員に必要な能力と資質を表2に示した。必要な能力としては、わかりやすい授業ができること、家庭科に関する十分な知識と技術を持っていること、教える技術として、話し方、板書の文字の美しさ、正確さが挙げられた。資質の面では、生徒と話し、聞き、信じること、自分から生徒とコミュニケーションをとることなどがあり、生徒との関わりの方から考えていることがわかる。逆に、その日の機嫌で態度が変わったり怒ったりする、生徒の話を受けない、見た目だけで判断する、ひいきする先生にはなりたくないとの意見が、ほぼ全員から出された。

表3と表4には、同じ10名の自己課題を示す。表3は、教科指導の課題、表4は学級経営に関する課題である。教科を教えるために不足しているのは、家庭科全般の知識、とりわけ被服の知識と技術であり、調理実習の技術と考えている。また、生徒がわかりやすい授業をする力と生徒の発言や質問に対応する力が不足している。これらの対応力は、短大の模擬授業では気づくことが難しいので、教育実習で経験したことが課題発見につながっている。多くの学生が、授業づくりには準備が大切であることに気づいている。

表2 自分がなりたい先生像 2020年度・2021年度2年生(10名) (筆者まとめ)

能力	資質
授業がわかりやすい	生徒の話を聞く
順序よく教えられる	生徒のことを考える
知識を十分に持っている	生徒を信用する
質問に答えられる	全否定しない
作業が丁寧で器用	親身になる
ハキハキ話してボリュームが大きい	積極的にコミュニケーションをとる
板書がきれい	いつも全力で行動する
誤字・脱字がない	良い話をする
書き順が正しい	差別(ひいき)しない



写真1 教育実習報告会の様子

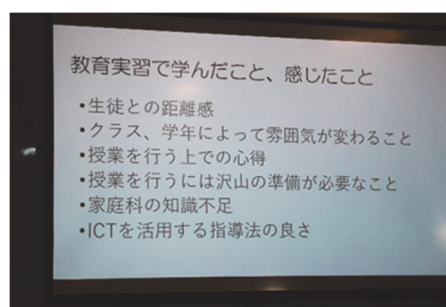


写真2 発表者のスライド

表3 教科指導の自己課題 2020年度・2021年度2年生(10名) (複数回答あり)

課題	内容	(人)	課題	内容	(人)
知識	全般	3	授業づくり	時間、構成	2
	被服	3		理解しやすい伝わる	2
	経済	1		楽しいおもしろい	1
	消費者問題	1		評価の観点を含む	1
	家庭科以外	1			
技術	調理	2	指導方法	話し方、説明	2
	被服	1		板書	2
	全般	1		わかりやすい教え方	1
生徒観	何を知らないか	1		意見が出た時の対応	1
	疑問点	1		実技の教え方	1
自身の性格	落ち着いて取り組む	1			

表4 学級経営に関する自己課題 2020年度・2021年度2年生(10名) (複数回答あり)

課題	(人)
話し方、聞き方、タイミング	7
注意の仕方、しかり方	3
学級をまとめる力	3
生徒とのコミュニケーション	3
生徒の観察、把握	3
生徒のために何ができるか考えること	2
人前で話すこと	1

総合生活学科の教職課程では、生徒と真摯に向き合える、愛情あふれる教員を養成することを目指してきた。教職科目は少人数の授業だったので、経験豊富な先生方とたくさん対話して得られたことは多かったに違いない。在学中の取得単位数は合計100単位を超えることが多く、それぞれに充実した2年間を過ごしたと推測する。それでも大学生に比べて専門分野の授業は少なく、短大卒業時点での知識不足は否めないが、生徒に対する愛情深い資質を持った学生が多いことが特徴でもある。最近、講師をしている卒業生何人かに学校現場の話を聞いたとき「大変なことは多いけれども、子どもはかわいい」「やんちゃな子ほどかわいい」と話すので安心した次第である。辛いことがあっても乗り越え、様々な勉強を続けながら成長することを願っている。